

共働き家庭における育児

良い親子関係を考える

繁多 進

一——人間の発達の特異性

人間の子どものほど親の手をわずらわす生物はほかにはないようである。昆虫の幼生は自分の親を知らずに成長し、自らの生活を自らの力で営んでいく。鳥類や哺乳類の子どものも、生後しばらくは親の保護を受けて成長するが、やがて自立してどれが自分の親かわからなくなってしまう。これらに比べると、人間の親子の関係はきわめて緊密であり、しかも、この緊密な関係が非常に長期間にわたって維持される。このような親子の関係は生物の世界において特殊なものと言ってよいであろう。

子の密接な関係が必要なのであるか。その理由は、人間の赤ちゃんがきわめて無力な状態で誕生するということと、さらに、成人に達するまでに非常に多くの時間を要するということによるのである。ウマやシカの赤ん坊は生まれてまもなく自らの力で立ちあがり、母親の乳房を自らの力で探りあて、吸うことができる。その上、成体に達するまでの期間も人間に比べてはるかに短い。イヌは生後の一年間で、人間にすれば満一八歳ぐらゐまでに成長する。馬も四歳といえればダービー馬である。それに比べると人間の発達はなんと遅々としたものであるか。完全に自立するまでに二〇年近くも要する動物などほかにはない。しか

も、不思議なことに、この発達期間の長期化現象は、人間の進化の過程でもたらされたものだといえるのである。つまり、人間が進化すればするほど、成人に達するまでの期間が長くなってきたのである。それほどまでに、人間が成長し、発達するということは大変な作業なのである。

子どもの発達期間が長いということ、親の側からみれば、子どもを養育しなければならぬ期間が長いということとを意味する。人間の場合、このように養育期間が長いゆえに、親子関係がきわめて重要なものになっているのである。もし、イヌのように、一年で成体に達するのなら、母子関係もさほど重要で

はないであろうし、まして、父子関係が入り込む余地などほとんどないであろう。ところが、人間はきわめて長期の養育期間を要する。ここに、親子関係のあり方が子どもの成長に大きな影響を及ぼす要因があるのである。

二——母性的養育の重要性

生まれたばかりの人間の乳児はきわめて無力である。誰かの保護なしには自らの生命を維持することさえできない。このような乳児を世話し、保護するのは多くの場合母親である。母親の乳児に対する愛情にみちた働きかけや世話、あるいは、母親との親密で継続的な相互交渉と

- 一——人間の発達の特異性
- 二——母性的養育の重要性
- 三——母子関係—アタッチメントの発達
- 四——相互交渉の重要性
- 五——良いアタッチメントと悪いアタッチメント
- 六——アタッチメントの型と母親の態度
- 七——保育園児と家庭児
- 八——働く母親への助言

いったものが、その後の子どもの発達に大きな影響を及ぼすことは疑いないことであろう。

かつて、子どもの人数に対して、保育者の数があまりにも少なかった時代の乳児院や養護施設において、ホスピタリズムという現象が大きな問題になった。世界中の乳児院や養護施設において、死亡率や罹患率が高く、身体的にも精神的にも発達が悪く、さまざまな習癖をもつ、などの障害が顕著にみられ、大きな問題となったことがあったのである。

この現象を詳細に検討したボウルビーというイギリスの精神分析学者は、「乳児と母親との人間関係が親密かつ継続的で、しかも、両者が満足と幸福感に満たされるような状態が、乳幼児の性格発達や精神衛生の基礎である」と指摘し、乳児院児や養護施設児に、知的発達遅滞、情緒的な障害、対人関係能力の欠如、など多くの欠陥が生ずるのは、結局、母性的養育の喪失（マターナル・ディプリベーション）という事態がもたらすものであると結論づけたのである。つまり、簡単にいえば、「母性愛はビタミンと同様、子どもの健全な発達にとって欠くことのできないもの」と指摘したのである。

もちろん、ボウルビー自身、子どもに継続的な愛を与えるものは、かならずしも生母なければならぬとはいっていない

い。そのような役割をとれる代行者がいればそれでよいのである。事実、今日の乳児院や養護施設における保育者の大増員は、これらの施設からホスピタリズムという現象を消失せしめると言ってもよいであろう。反対に、今日においては母性的養育の喪失という問題は、施設ではなく家庭の問題になってきつつあるのである。現に、ロンドンには、家庭で両親と生活していながら、母親が子どもを虐待したり、子どもの世話を放棄したりということ、母性的養育の喪失にさらされている子どもたちだけを集めた保育園というのがある。そのような母親に子どもをまかせていたのでは子どもの発達は保障されないということから、せめて日中だけでも、そのような養育不良な母親から子どもを離し、保母や児童指導員が愛情のこもった世話をすることで、子どもの発達を保障しようというのである。

かつて、「どんな良い施設も、どんな悪い家庭よりも劣る」と言われた頃に比べると、大変なさまざまりである。このことは、今日、世界的な懸念となっている「母性の喪失」という現象を如実に物語っていると言ってもよいであろう。「母性本能」という言葉が多くの人々に信じられていた時代においては、家庭が子どもの養育の場としての最良の場であること

を疑うものはいなかったのである。しかし、今日では、母性を喪失した母親が数多く存在することを誰もが知っている。

「家庭で母親のもとで育てられれば安全だ」というのが、すでに迷信になっていることも多くの人が知っている。母親になった、あるいは、母親になるべき婦人に、いかに母性を獲得させ、いかに母性を発達させるかという問題が、心理学や精神医学の新たな大きな課題になってきているのである。このことは、いかに時代が変わろうとも、子どもの発達における母親の役割の重要性には何の変化もないということの意味しているのである。

三 母子関係

一 アタッチメントの発達

子どもの発達にとって、なぜ、母親の役割がそれほどまでに重要なのであろうか。それは、母子関係が子どもが最初に経験する人間関係であるからである。子どもは母子関係を通して、人間関係能力を発達させていく。最初に経験する母子関係が信頼に満ちたものであるならば、子どもは「人間」に対する基本的信頼感を獲得し、父親、きょうだい、友だちというように、人間関係の輪を広げていく。もし、最初に経験する母子関係で不安を伴うものであれば、子どものその後

の対人関係能力の発達に大きな影響をもたらすであろう。生まれればかりの乳児は、もちろん、自分のまわりの成人のうち、どの人が自分の母親であるかを識別できない。誰に対しても同じように反応し、誰の世話をも喜んで受ける。しかし、やがて母親と他の人々を区別するようになり、母親の顔を見ると喜び、母親の顔が見えなくなると泣きさげ、母親を追い求めるようになる。母親との接近や接触を強く求め、母親がそばにいると安心する。このように、多くの対象の中から母親という特定の対象に選択的・弁別的に注意を向け、それを追い求めるといふ乳児の特徴的な行動傾向は、一般に、アタッチメントと呼ばれている。つまり、アタッチメントとは、子どもの母親に対する情愛的な結びつきなのである。母親に対する愛着と言ってもよいであろう。

このアタッチメントが生後何カ月頃から形成されるかは正確にはわかりにくい。なぜならば、アタッチメントというのが心理的な結びつきであるため、目に見えるものではないからである。しかしながら、アタッチメントが形成されていると示すアタッチメント行動は観察することができる。母親が見えなくなると泣き、母親がもどってくると喜ぶという具体的なアタッチメント行動が

はつきりと表面にあらわれてくるのは、一般的に、生後六、七カ月頃からである。もちろん、この時期に突如としてアタッチメントが形成されるといいうのではなく、それまでの間に、少しずつ形成されてきて、生後六、七カ月という時点でそれがはつきりと行動となつてあらわれてくると考えるのが妥当であろう。

なぜ、乳児は母親を特定の対象として選択し、母親に対して特別の愛着をいだくようになるのであろうか。このアタッチメントの起源に関する理論として、従来、二次的動因説というのが有力であった。乳児に基本的動因として、飢餓、渇き、苦痛、寒さ、などがある、これらの一次的動因の低減は乳児の自律的行動では達成できない。それが常に母親によってなされていると、乳児はやがて母親の姿を見ただけで喜び、母親の声を聞いただけで泣きやむようになる。この場合、乳児の生理的動因を解消させるのは哺乳であり、苦痛や寒さの排除である。これらは一次的報酬と考えられる。この一次的報酬が常に母親によって与えられていると、乳児は母親を、緊張を解消し、快や満足を与えてくれる特別な意味をもった存在として知覚するようになる。つまり、母親は乳児にとって二次的強化刺激としての意味をもった存在になる、というのが二次的動因説の概略である。この

説をごく簡単に言いなおせば、乳児にとって基本的に価値のあるのはミルクであり、そのミルクをくれるのは母親だから、母親にも価値が生じ、母親に対して愛着を持つようになる、ということなのである。

この説は多くの精神分析学者や学習心理学者から支持され、一時期、ほとんど疑うものがないというほどの状況であった。ところが、その後、動物実験や人間の乳児の観察などから、この説では説明できない事実がたびたびと判明し、二次的動因説は根拠のない理論となつてしまったのである。つまり、ミルクを与えるものがかならずしも愛着の対象とはならないし、ミルクを与えたことのないものが愛着の対象となりうるという事実がたびたびと判明してきたのである。

四 相互交渉の重要性

アタッチメントという現象が「生理的欲求の充足」ということと関係ないとするならば、アタッチメントという現象をもたらすものはいったい何なのであろうか。なぜ、子どもは母親という特定の対象に特別の愛着をいだくようになるのであろうか。それを説明するものとして、現在、もっとも説得力のある理論は、さきほどのポウルビイによると比較行動学的理論

である。彼は、人間の乳児は成人との接近や接触を求める生物学的な傾性をもって誕生すると主張する。すべての生物は自らの生命を維持するための生物学的傾性をもって誕生する。この生物学的傾性という言葉は本能という言葉におきかえてもよいであろう。もちろん、人間として例外ではない。自らの生命を自らの力で維持できない人間の乳児にとって、略奪や遺棄から自分を守るためにもっとも安全な方法は、強力な成人のそばに居ることである。人間の乳児にとって、成人との接触や接近は自らの生命を維持するためにきわめて重要なことである。

ところが、人間の乳児の身体的な接触を維持するための抱きつきやしがみつきは能力は進化の過程で弱められ、霊鳥類の中で最小である。サルや赤ん坊は母親のおなかにしがみつき、母親が木から木へととびあがっても落ちるようなことはない。もちろん、人間の赤ちゃんにはそんな芸当はできない。したがって、人間にとつては「泣き」や「微笑」のような信号機構が接近や接触を維持するためにきわめて重要なものとなっている。「泣き」は成人を乳児に接近させる機能をもち、「微笑」は接近した成人をより長く近くに維持する機能をもっているのである。

一方、成人の方も生物学的に乳児に接近し、保護しようとする行動傾性をもつ

ているのであるが、その行動は乳児の発する「泣き」や「微笑」のようなシグナルによって一層活性化され、両者の間に活発な相互交渉が行われるようになる。乳児が略奪や遺棄からの保護を求めて信号を発するとき、それにいつもすみやかに応え、乳児との相互交渉をいとなむものが特定の誰かであると乳児に弁別できるとき、乳児はその対象に対してアタッチメントを形成する。アタッチメントが形成されるか否かを決定するのは、乳児の保護をめぐって、乳児と特定の成人との間でいとなまれる相互交渉の量なのである。アタッチメントが形成されるためには、少なくともある程度の相互交渉の量が必要なのである。もちろん、成人の側の反応の適切さという質的な要因も重要であるが、それはアタッチメントが形成されるか否かにかかっているのではなく、アタッチメントのパターン、つまり、どのようなアタッチメントが形成されるかということとかわわっているのである。

特定の対象に対するアタッチメントが形成された後は、乳児はアタッチメントの対象からの分離に対して抗議を示す。この抗議は「危険なし」に対する乳児の生得的な反応である。保護してくれる成人からの分離は乳児にとってきわめて危険な状態であるので、この危険な状

態からの回復を求めた抗議がなされるのである。抗議によってアタッチメントの対象が帰ってくるならば、そこで悲しみの反応は終息し、一時的に見えなくなっても、自分が欲すれば、かならず帰ってくるのだという信頼感を対象に対して持つようになる。しかし、抗議の「泣き」が無視され続けるならば、やがて、乳児は対象に対して信頼を失うことになり、不安定なアタッチメントを形成することになる。以上がボウルビー理論の概略である。

五——よいアタッチメントと

悪いアタッチメント

結局、ボウルビーは、乳児が母親に愛着をもつようになるのは、人間という種に基本的に定められたものであり、そのことは、その後の子どもの健全な発達にとつて必要不可欠からざるものであると主張しているのである。もちろん、このアタッチメント対象は必ずしも生母である必要はない。主要な養育者としての役割を演じる人なら誰でもがなり得るものである。ただ、多くの場合、主要な養育者は母親であることが多いので、多くの乳児は第一義的なアタッチメント対象としての母親を選択するものである。

ところが、ほとんどの乳児が母親への

アタッチメントを形成するといっても、そのアタッチメントの形態は一樣ではない。信頼に満ちた、安定したアタッチメントを形成する子どももいれば、不安をもったアタッチメントを形成する子どももいる。簡単に言えば、「良い」アタッチメントと「悪い」アタッチメントがあるのである。大切なことは、良いアタッチメントを形成することなのである。母親への良いアタッチメントを形成した子どもは、将来にわたって、健全な性格を発達させ、精神的に健康な人間に成長する。反対に、悪いアタッチメントを形成した子どもは、将来においても、社会に適應していくのに多くの困難をいられることであろう。

子どもが母親に対してどのようなアタッチメントを形成しているかをとらえるための実験室的方法を見出したのは、ボウルビーの同僚であるエインスワースである。その方法はストレンジ・シチュエーションと呼ばれている。まず、子どもはそれまで一度も入ったことのないプレイルームに母親と共に入室する。その後、見知らぬ人が入ってきたり、母親が退室したり、また、帰ってきたり、というような八つの場面で構成されている。

このような事態での子どもの行動から、大きく分けて、A群、B群、C群の三つの群に分類される。B群の乳児たち

は、それまで入ったことのない見知らぬ遊戯室であるにもかかわらず、母親がいるということで安心して、母親を安全の基地として使用しながら、探索活動を活発に行う。母親の退室に対しては悲しみを表わし、母親を追い求めるが、母親が帰ってくると、それを喜び、母親との接触や相互交渉を求める。このB群は正常群であり、いわゆる良いアタッチメントを形成している子どもたちである。

C群の子どもたちは、最初の場面から母親がいるにもかかわらず、不安の徴候を示す。分離場面では強い悲しみや苦悩を示し、母親との再会場面でも母親との密接な接触を求めるが、それと同時に、母親に対して反抗的な接触や相互交渉を示す。この群の子どもたちはアンビバレント群と呼ばれ、母親を完全に信頼していない子どもたちなのである。

C群よりもはるかに深刻なのがA群である。A群の乳児たちは、分離場面でも泣くことはめったにない。そして、再会場面でも母親を完全に無視するか、あるいは、接近行動と回避行動のいりまじったような行動をするかのどちらかである。ともかく、A群の子どもたちには母親を回避する行動が見られるのである。なぜ、A群の子どもたちは母親を回避するのであろうか。母親への接近や接触を

求めるのは、すべての子どもたちに見られる生得的な行動ではないのか、という疑問が当然生じるであろう。もちろん、A群の子どもたちも、これまでに何度も何度も母親への接近や接触を試みたのである。しかし、その度に、母親の拒否にあい、その結果、母親から拒否されることとの悲しみを避けるために、母親への接近を回避しているのである。

六——アタッチメントの型と

母親の態度

A群、B群、C群に分類される子どもたちの母親が家庭でどのような養育をしているかという点を検討したこれまでの研究によれば、いくつもの明らかな差異が見出されている。まず、子どもの発するシグナルに対する反応性に差異が見られる。B群の母親たちは子どもが発するシグナルに対して敏感に、しかも適切に反応する。このことは、おっぱいをほしがっているとか、おむつがぬれているといったことばかりでなく、母と子の相互作用が行われる一般的な事態すべてに及ぶことであった。これに対して、A群やC群の母親たちは、子どもの発するシグナルを無視したり、非常に遅れて反応したり、きわめて不適切なやり方で反応したりすることが多かったのである。

もう一つの明らかな差異は密接な身体的接触に関するものである。A群の母親たちは、子どもとの身体的接触に嫌悪感をもっているというのである。子どもを抱きあげることがあっても、それは子どもの行動を制止したり、干渉したりするためのもので、愛情のこもった身体的接触をすることはほとんどないというのである。C群の母親たちは、子どもとの身体的接触に嫌悪感をもつようなことはないが、B群の母親に比べると、愛情のこもった身体的接触が少なく、より干渉的で、より拒否的な傾向を示したのである。

さて、働く母親にとってもっとも心配なことは、接触時間の短いことが子どものアタッチメントの発達に悪い影響を及ぼしはしないかという点であろう。保育園児は、①日中、母親と分離している、②複数の人によって養育されている(母親と保育)③集団で養育されている(母親と保育)④集団で養育されている(母親と保育)の発達にどのような影響を及ぼすのかを検討することは緊急の課題である。この点に関して、これまで欧米においていく

七 保育園児と家庭児

つかの研究がなされているが、保育園児と家庭児の間にならぬ差異もみられなかったとする研究と、保育園児のアタッチメントの発達には問題がみられたという研究とがあり、必ずしも一定した見解は得られていない。

この点に関して、私も質問紙による調査をすでに行っている。その結果、アタッチメント行動の開始時期に若干の差がみられ、家庭児が生後六カ月から七カ月にかけて、急速にアタッチメント行動が活性化することに対して、保育園児は生後七カ月から八カ月にかけて活性化するというように、生後一カ月ほどのズレがみられた。しかし、生後八カ月ではすでに追いつき、その後、満一歳、満二歳と年齢が上昇するにしたがって、むしろ保育園児のアタッチメント行動の方が家庭児のそれよりも活発になってくる傾向がみられたのである。しかしながら、一、二歳の保育園児のアタッチメント行動は、接近や接触を求める行動や後追い行動においてとくに高く、母親を安全の基地として使用する探索行動は家庭児より低いという特徴をもっていたのである。

このような統計的な差異はみられたが、アタッチメント行動の開始時期のズレは、保育園児の場合、家庭児に比して、母親との接触量に制限があることから生じたものであろうし、一、二歳児の接近

や接触を求める行動の後追い行動が多いのも、一緒にいる時間が短いことから、せめて一緒にいる時間は接触していたという気持のあらわれであろう。これらの差異は当然のこととも言え、とくに問題にすべきことでもないであろう。むしろ、この調査から得られた結論は、ほとんどの保育園児が家庭児と同じように健全なアタッチメントを発達させていたということである。もちろん、保育園児の中にも、健全なアタッチメントの発達がなされていない子どももいた。それは家庭児においても同様である。そのような子どもは、母親は、全般的に養育態度が拒否的で、子どもとの相互作用を心から喜んで行うことができない母親たちだったのである。つまり、この研究から得られた結果が示すものは、子どものアタッチメントの発達に影響するのは、保育園児か家庭児かという養育条件の差異よりも、日常の母親の子どもに対する態度なのだということなのである。現在、私どもはストレンジ・シチュエーションによる研究を進めているが、ここにおいても、その目的は、単に保育園児と家庭児の差異を求めるというのではなく、たとえ接触時間は短かくても、どのような点を押えれば子どものアタッチメントの発達に支障をきたさないのかという、その要因をさぐることを究極の目的としているのである。

八 働く母親への助言

これまで述べてきたように、保育園児に関する研究はまだ十分なものではないが、明確な結論が得られているわけではなく、明らかな結論が得られていないが、これまでに得られた知見から、働きながら育児に従事している母親たちにある程度の助言を与えることは可能であろう。

まず、第一には、子どもとの限られた接触時間をどのように有効に使うかという問題である。量的な不足を補うために質の高い相互作用が必要なことはいうまでもないことである。質の高い相互作用とは愛情のこもった相互作用のことである。簡単に言えば、親子がいっしょに居る限られた時間をできるかぎり楽しいものにするということである。親子の接触というのは身体的接触ばかりではない。顔と顔を見合わせたり、お話をしたり、遊んだりという接触も大切である。このようなことは家事をしながらでもできることである。保育園に子どもを迎えに行き、帰宅するまでの帰り道から親子の楽しい相互作用が行われるように努めなければならぬ。帰宅を急ぐあまり、子どものちょっとした道草も許さず、強引に子どもの手をひっぱって足早

に歩くというのでは、やっと母親に会えた子どもの喜びの気持ちを無視するものであろう。

夕食の仕度をしながらでも子どもとの楽しい接触は可能である。手を動かしながらでも子どもの話しかけに耳をかたむけ、応答することはできる。また、食卓の準備を子どもに手伝わせるのもよい方

法である。手伝うことを通して親子の間に相互作用が生じる。ともかく、親も子どもいっしょにいることが心からの喜びであるような状況であれば問題ないのである。

母親の中には、短い接触時間に一生懸命しつけをしようとする人がいる。たしかに、しつけも大切なことではあるが、

保育園児の場合は、保育園でたえずしつけられているといってもよい。母親は愛情刺激の供給者としての役割を十分にとることが何よりも大切なのである。母親の仕事を持つということは必ずしも不利な面ばかりがあるわけではない。たえず子どもと一緒にいる母親よりも、子どもと離れる時間があることで、かえって新鮮

な気持ちで子どもと接することもできる。懸命に母親が働いている姿は子どもにも必ずやよい影響を与えるだろう。自信をもって仕事と育児に励んでほしいものである。〈横浜国立大学教育学部助教授〉